

博物館だより

No.227

令和7年10月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667



博物館休館日カレンダー
2025年10月

日	月	火	水	木	金	土
28	29	30	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	1

休館日

◆博物館NEWS

ふるさと遺産フェスタ

「秋月の乱150年」

来年は明治9年（1876）10月29日に、現在の育徳館高等学校周辺を舞台に繰り広げられた「秋月の乱」から150年目となる節目の年にあたります。また、みやこ町制施行20周年を迎えます。これらを記念した事業として、ふるさと遺産フェスタ「秋月の乱150年」を開催します。お誘いあわせの上、是非ご参加ください。

開催日時：令和7年10月19日（日）
12時30分～16時

開催場所：育徳館高等学校

●「秋月黒田藩砲術林流抱え大筒」の演武
●記念講演会

●「秋月の乱150年を考える」パネルディスカッション

*詳細については「広報みやこ」10月号をご参照ください。

*参加を希望される方は、みやこ町歴史民俗博物館まで電話で申し込みをお願いします。



▲大迫力の「抱え大筒」の演武。

これまでの活動状況



▲平成21年のバスハイク（福岡市博物館）



▲平成28年の三重塔すす払い

みやこ町歴史民俗博物館友の会 30周年記念演奏会

今年はみやこ町歴史民俗博物館「友の会」が平成7年（1995）に発足して30年目となる節目の年にあたります。これに伴いみやこ町歴史民俗博物館友の会主催の記念事業として育徳館中学校・高等学校管弦楽部による記念演奏会を開催します。お誘いあわせの上、是非ご参加ください。

開催日時：令和7年10月19日（日）
10時～11時

開催場所：育徳館高等学校 思永館

*参加を希望される方は、みやこ町歴史民俗博物館まで電話で申し込みをお願いします。

◆講座・教室・催し物ガイド

10月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

10月4日（土） 9時30分～

【古文書講座】

10月11日（土） 10時～

【古典かな講座】

10月18日（土） 9時30分～

【みやこ学講座】

10月25日（土） 10時～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

◆わたしのお気に入り「ふるさと遺産」

絵画コンクール受賞作品 入館者投票開始！

今年も町内の小中学校の児童・生徒を対象に実施した絵画コンクールの応募作品について審査を行い、選出された優秀賞6点及び佳作6点を10月1日から19日まで博物館ホールに展示します。最優秀賞1点については、優秀賞6点の中から有料入館者による投票により決定します。

「芸術の秋」に児童・生徒の力作を是非ご覧ください。



▲過去に行われた来館者による投票の様子

8月・9月の業務日誌から

8月24日（日）博物館で、夏休み体験教室「鉱物標本を作ろう」を開催しました。みやこ町をはじめ歴史の中で利用されてきた様々な鉱物について学芸員が説明を行い、10種類の鉱物標本を完成することができました。

9月10日（水）黒田小学校3年生の児童を対象に出前授業を実施しました。学校にある橘塚古墳や黒田小学校の「第1期生」である元号「昭和」の考案者吉田増蔵について詳しく学ぶことができました。



▲地域の歴史を通して「黒田じまん」を見つけることができました。



▲みやこ町の歴史に関わる鉱物を詳しく学ぶことができました。

みやこの歴史発見伝 181

「吾輩は猫である」

120年

大国ロシアとの戦いの中で

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から、今月で3年8ヶ月が経過します。これまでに両国では多数の死者が報告されていますが、未だに終息の気配はみられません。明治37年（1904）に日本が大国ロシアを相手に戦ったのが日露戦争です。夏目漱石の家に「猫」が迷いこんだ明治37年（1904）6月頃、日本軍は「難攻不落」を誇るロシア軍の「旅順要塞」を包囲します。激戦の末、旅順要塞のロシア軍は降伏し、今から120年前の明治38年（1905）の正月に国内で戦勝を伝える「号外」が配られる中で、「吾輩は猫である」第1話を掲載した雑誌『ホトトギス』が発売されました。大国ロシアに勝利した戦勝ムードに沸く一方、旅順要塞の陥落で1万7千人、戦争全体では8万人以上の日本人の尊い命が犠牲になりました。『吾



夏目漱石肖像
(みやこ町歴史民俗博物館蔵)

輩は猫である』の主人公「猫」の姿は、戦勝の一方で、心理的に疲弊した人々に「癒し」をもたらしたと伝えられています。

堺利彦も魅了した「猫」

それまでの小説とは異なり、読みやすい文体で書かれた『吾輩は猫である』は文字通り子どもから大人まで幅広い年代の人々に愛読されました。旧制豊津中学（現育徳館高等学校）出身でロシアとの戦争に対して頑なに「非戦」を唱えた堺利彦もその1人です。あまりの面白さに「家族を相手に『猫』の朗読会を3日続けて開きました」という「ファンレター」ハガキを全く面識のなかった漱石に送っています。このような想定外の反響が、その後、作家に転身する漱石の自信に繋がったとみられます。

長編小説「吾輩は猫である」

今から120年前の10月6日に、大ベストセラーとなった『吾輩は猫である』の単行本が刊行されましたが、わずか20日で完売したと伝えられるなど、この当時、人々の関心はこの一匹の猫に注がれていました。この頃の漱石は、東京帝国大学（現在の東京大学）の講義など多忙を極めていましたが、6日間で400字詰め原稿用紙350枚を一気に書き上げるなど驚異的なスピードで執筆作業に取り組んだと伝えられています。このよう



夏目漱石直筆のイラスト
(当館所蔵)

な「神業的な速筆」が成し遂げられたのは、漱石の執筆能力の高さと「猫」への愛情表現であったのかもしれない。その後、漱石の顔をもつ猫の風刺画が新聞に掲載されました。漱石はこの風刺画を犀川村（現みやこ町犀川）に帰郷していた小宮豊隆宛ての手紙の冒頭に模写して送っています。この手紙は、当館が所蔵する夏目漱石関連資料の中でも特に、漱石のユーモアがふれる資料として来館者の人気を集めています。

愛猫の死と「死」通知

「猫」が夏目家に居候して4年目を迎えた明治41年（1908）9月13日、『吾輩は猫である』のモデルの「猫」が亡くなり、その遺骸が庭の木の下に埋葬されました。漱石はその墓標に「追悼句」をしたためたと伝えられています。この「猫の死」は新聞でも報道され、漱石が猫と特に親交のあった人物に宛て「黒梓付きのハガキ」でその死を「報せた」ことを掲載し、世間の注目を集めました。これが所謂「猫の死亡通知」で、みやこ町出身の小宮豊隆を含む近親者4名のみに送られたこの希少なハガキは当館を代表する『吾輩は猫で

ある』関連資料として特に重視されています。漱石が記した「通知」の文面から「猫」が亡くなった詳細な状況を把握できますが、この時、小宮豊隆が主人公のモデルになった小説『三四郎』を執筆していたことは特に注目されます。またハガキの縁辺は丁寧な「黒梓」で縁取られており、「猫」を亡くした直後の漱石の心情を垣間見ることができます。

「猫」への「恩返し」

夏目家に「猫」が迷い込んだ頃、漱石はイギリス留学時に患った「心の病」が悪化しており、家族でも近寄り難い状況でしたが、この「猫」は寝ている漱石の腹や背中に乗って寝ることもありました。しかし漱石は怒ることなく、この屈託のない猫の姿に心が癒され、現在、注目されている「アニマルセラピー」効果によって結果的に「心の病」の克服につながったという見方もされています。



膝の上で眠る猫

近年、「小宮豊隆資料」の整理作業中、鏡子夫人が小宮豊隆に宛てた「猫の法事案内」ハガキが新たに発見されました。「猫」の死から4年後の大正元年（1912）9月11日の日付がみられ、「猫の法事を行うので来てください」という内容が記されています。当初は飼うことを反対していた鏡子夫人ですが、「猫」への哀悼の意を垣間見ることができ貴重な資料です。また鏡子夫人は、毎年、「猫の命日」に鮭の切り身と山盛りにした鰻節1碗を「猫」の墓前に供えたと伝えられています。「ベストセラー小説」と「病の治癒」を漱石にもたらすことになったこの黒猫は、夏目家にとって文字どおりの「福猫」となりました。漱石の「猫の死亡通知」や鏡子夫人の「法事案内」をみると、夏目家にとって「猫」は、かけがえのない家族であり、恩人であったことを伺うことができます。このように、日本で一番有名になった「猫」ですが、「名前はまだ無い」と小説の冒頭にあるように、最後まで名前が付けられることはありませんでした。

晩年を迎えた鏡子夫人の家には、数えきれないほど多くの猫が住み着いていたという記録が確認できます。本来「猫嫌い」であった鏡子夫人がこのように「保護猫活動」を行ったのは夏目家の救世主となった「猫」への「恩返し」であったのかもしれませんが。（井上信隆）